

短期語学留学プログラムの効果測定（1）

野中辰也・田中ゆき子・隅田朗彦

Assessment of a Short-Term Study Abroad Program (1)

Tatsuya Nonaka, Yukiko Tanaka
and Akihiko Sumida

1. はじめに

本学国際文化学科では、その創設当初より英語教育に力点をおいてきている。具体的には、英語教育における「量の確保」および「個人差への対応」を目指し、自学自習プログラム（SEM: Seiryō English Multiathlon）の導入や能力別による授業クラス配当などを取り入れている¹⁾。また、アメリカでの3週間のホームステイプログラムを中心とした授業科目「海外語学研修」により、実際の英語使用・異文化体験の機会を在學生に与えてきて²⁾もいる。さらに、在學生や卒業生を姉妹校であるアメリカ・ワシントン州のグリーン・リバー・コミュニティー・カレッジ（Green River Community College：以下GRCC）へ1年間語学留学に派遣するという取り組みも進めてきた。

上記の取り組みを進めるうち、特に海外語学研修に参加した学生やその他の在學生から、留学したいという声が多く聞かれるようになった。在學生を対象にしたアンケートでも、留学したいとする学生が一定数以上存在し、短大2年生で就職活動があるにもかかわらず留学を希望するという学生も複数いることがわかった。しかし、実際に留学に踏み切る学生は毎年1名いるかどうかという状況が続いていた。

留学を躊躇する学生に話を聞いたところ、その理由は大きく分けて2つにまとめられた。1つは金銭面での負担の大きさであった。1年間留学する場合は、留学先での学費・生活費を合わせて最低でも200万円程度かかるということが留学経験者から伝えられていた。もう1つの理由は、短大卒業時期の問題であった。1年間の留学の場合は、短大2年の後期から1年間の留学を経て、帰国後に本学2年後期分の単位を修得して卒業となり、短大在籍期間が1年長くなるのである。帰国時期が7月前後ということもあり、その後の就職活動などに不安を感じ、留学に躊躇するという学生も少なくないようであった。

本学英語担当教員としては、英語の運用能力を高めると同時に異文化体験をするには留学はよい機会であると考え、上記の問題点を克服する留学プログラムを検討した。その結果、費用の学生負担をできるだけおさえ、卒業時期を遅らせることなく留学を可能にするために、留学費用を一部本学が負担したうえでの3ヶ月および6ヶ月留学という短期語学留学プログラムを考案した。

プログラムは学内での承認を得て、2000年9月、10名（1年生5名、2年生5名）が第1回留学派遣生としてGRCCへと渡米した。そして、同年12月、3ヶ月留学を終えた6名（1年生1名、2年生5名）が帰国するに至った。

本稿では、上述のプログラムが実際に意味のあるものであるかを検証するため、「派遣生の英語運用能力の向上」に焦点をあてて効果測定をし、その結果を報告する³⁾。

2. 留学プログラム概要

2. 1. 留学先・期間

留学先は本学の姉妹校であるGRCCである。派遣生はGRCCの集中英語課程に3ヶ月または6ヶ月留学する。3ヶ月留学の場合は、GRCCの秋学期（9月中旬～12月上旬：オリエンテーション週および授業週）、6ヶ月留学の場合は秋学期に加え冬学期（1月上旬～3月中旬：オリエンテーション週および授業週）を受講することとなる。

2. 2. 派遣人数

国際文化学科在学生から、毎年10名（1年生5名、2年生5名）を派遣する。1年生は、事前に3ヶ月・6ヶ月の2つの留学期間のいずれかを選ぶことができる。2年生は、卒業時期の問題から、3ヶ月留学のみとなる。派遣希望者が多い場合は、事前にITP Pre-TOEFL⁴⁾および英語面接試験により派遣生選抜を行っている。

2. 3. 留学費用負担

留学にかかる諸費用のうちGRCCに支払う授業料については、留学期間の長短にかかわらず、本学が全額負担し、それ以外の費用については派遣生の自己負担となっている。この結果、3ヶ月留学にかかる費用は、本学で開講している3週間の「海外語学研修」にかかる費用と同程度に押さえられている。

また、派遣生は、本学への納入金を通常どおり全額納入している。これは、留学先での授業を本学の授業に読み替える（単位互換）ための措置である。

2. 4. 留学滞在先

派遣生は、留学中、GRCCが斡旋するホストファミリーの家庭に滞在する。ホストファミリーとの交流による英語運用能力の向上および異文化体験を期待して、こうした措置をとっている。派遣生は、ホストファミリーに家賃及び食費を支払うことになる。

2. 5. 事前・事後指導

派遣生は、留学の前後に、本学が行う事前・事後指導を受ける。事前指導では留学の心得や基本的な生活についての情報を学んだ。事前指導は約10回行われ、指導内容は次の項目である。

(1) アメリカの大学の仕組み、(2) ホストファミリーとのコミュニケーション、(3) 文化的差異、(4) カルチャーショック、(5) アメリカでの生活、(6) 日本の紹介、(7) 留学でよく使われる英会話、(8) 渡米準備（ビザ、パスポート、持ち物）。事後指導では、5回にわたって留学について様々な視点からディスカッションを行い、さらにレポートを作成することになる。レポートは本学のホームページに発表する予定である。また、留学中も、電子メールによる指導が随時行われている。

2. 6. 留学先で受講した授業の単位認定

留学先で受講した授業のいくつかを本学の英語科目の単位として認定している。派遣生のうち1年生については、1年次後期（留学中）に本学で開講されている必修科目を受講することができない。そうした科目については帰国後の2年次後期に受講することになる。

3. GRCCでのプログラム内容

3. 1. 留学生用プログラム

GRCCでは、全学生数約9,000人のうち、400人程度が海外30余カ国からの留学生である。大学課程入学に際してTOEFL500点が要求され、その規定に満たない留学生は、集中英語課程の履修が義務付けられる。2000年は各学期約75～100人の留学生が集中英語課程に在籍している⁵⁾。

集中英語課程の在籍学生はアジア出身の学生が7～8割を占め、日本人も多いが、同レベルでも母語が同じ学生は違うクラスに編成するなど、母語を使わない環境を作る配慮がされている。

3. 2. 集中英語課程のしくみ

集中英語課程に学生が登録すると、まず英語能力試験（ミシガン英語能力テスト、作文及び面接）を行い、その結果に基づいて5段階のレベルに分けられる。授業は同レベルの学生で、1クラス10～15人で編成する。レベルの決定は3つの試験の合計点によって行われるが、そのうちのミシガン英語能力テストの成績と授業レベルおよび授業概要は表1のようになっている。

表1：ミシガン英語能力テストスコアと授業クラス配当

ミシガン英語能力テスト スコア	Level	授 業 概 要
0-32	1	日常生活に必要な英語を学ぶ。
33-47	2	日常生活に必要な英語に加え、大学生活に必要な技術を学び始める。大学図書館の使い方、授業での小グループディスカッションなど。
48-61	3	アカデミック英語の基礎を学ぶ。簡単なりサーチ、ノートテキング、発表の仕方、ディスカッションなど。
62-74	4	レベル3で学んだ基礎力を伸ばす。小論文の書き方、ディベートなど。
75-84	5	TOEFL受験対策 大学課程の授業を受けながら、さらに作文力、読解力など大学の授業をパスするための英語力を養成する。
85-100		大学課程に入学可

授業は1限50分、12時から5時までの間に行われ、各学生は1日4時限のクラスを週5日受講する。1日のクラスは、「Grammar」、「Reading」、「Writing」、「Oral」に分かれている。1学期は12週間からなり、1年に、秋学期、冬学期、春学期があり、夏には特別コースもある。各クラスについて当該学期の成績が80点以上であれば、次の学期にさらに上級のレベルに進むことができる。79点以下の学生は同じレベルの授業を再履修することになる。Level 5に進んだ学期から大学課程の授業も並行して受講することができる。

3. 3. 派遣生の受講クラスおよび最終成績

本学からの留学派遣生10名は、留学先での授業に先立って行われた英語能力試験の結果により、Level 3 およびLevel 2 の授業を受講することになった。各レベルでの12週間の授業を受け、最終試験ではほとんどの派遣生が次のレベルに進むことができる成績を修めるに至った。⁶⁾それぞれのデータをまとめたものが表2である。

表2：派遣生の留学先での最終成績（2000年秋学期）

留学期間	派遣生	ミシガンテスト スコア	在籍クラス	最終成績 (%)			
				Gr	Rd	Wr	Or
3ヶ月	A	51	Level 3	90.0	92.6	90.0	90.0
	B	66	Level 3	97.0	89.7	92.3	97.0
	C	66	Level 3	92.6	92.3	92.6	90.4
	D	49	Level 3	91.2	87.1	91.2	89.0
	E	61	Level 3	90.0	91.4	90.0	86.5
	F	50	Level 3	93.4	83.5	93.4	93.0
6ヶ月	G	61	Level 3	86.5	86.3	86.5	88.7
	H	44	Level 3 (OrのみLevel 2)	90.0	80.8	90.0	97.0
	I	38	Level 2	92.0	93.1	92.0	92.0
	J	45	Level 2	88.5	89.9	88.5	78.3

Gr : Grammar, Rd : Reading, Wr : Writing, Or : Oral

4. プログラムの効果測定

4. 1. 効果測定の方法

留学プログラムが派遣生の英語運用能力の向上に効果があるかどうかを、より客観的に測定するために、留学前および留学後にそれぞれ行った英語運用能力テスト (ITP Pre-TOEFL) のスコアに伸びが見られるかを検証する。

本調査で使用したPre-TOEFLのような標準化されたテストは、異なる内容のテストであっても、2つのテストのスコアを比較することによって、英語力の差を見ることが可能である。本質的には留学前と留学後に受験するテストは、全く同じものを使用しなければ厳密な英語力の伸びを測ることができない。しかし、全く同じ内容のテストを実施した場合、1回目のテストの内容や解答を覚えている可能性があり、正確な英語力の伸長を測ることができない。

なお、第1回派遣生10名のうち現時点で帰国している派遣生は、3ヶ月留学を終えた6名のみである。今回はその6名の英語運用能力の伸長を見ることとなる。

4. 2. データ分析

留学前後でのPre-TOEFLの結果は表3のようになった。「リスニング」はSection 1、「文法」はSection 2、「リーディング」はSection 3⁷⁾のスコアを表している。表中に「*」が付いているのは、派遣生BがSection 2の一部の問題を見落としていて半数の設問に解答しなかったため、実際の能力の測定が不可能であるとみなし、そのスコアを平均値の算出やスコアの伸びの検証に使用しなかったことを表す。

表3：Pre-TOEFLスコア

派遣生	総合スコア		リスニング		文法		リーディング	
	留学前	留学後	留学前	留学後	留学前	留学後	留学前	留学後
A	420	430	44	49	41	40	41	40
B	417	*423	45	50	40	*36	40	41
C	380	450	39	49	37	50	38	36
D	387	433	42	46	41	43	33	41
E	377	373	38	42	37	36	38	34
F	373	437	38	49	37	44	37	38
平均	392.3	424.6	41.0	47.5	38.8	42.6	37.8	38.3

まず、上記のスコアの平均について、留学後の伸び率を見た。これは、単に留学前のPre-TOEFLスコアと比べて留学後のスコアがどれくらい増加したかを、パーセンテージで示すことにした。

Pre-TOEFLスコアの伸び率の平均を見ることによって、派遣生全体の留学の効果を大まかに捉えることはできる。しかし、それではスコアの差が十分に信頼できる差であるかどうか分からない。伸び率が3ヶ月留学した効果として意義のあるものかどうか、伸び（留学前後のテストスコアの差）がテスト誤差の範囲内に留まっていないかを統計的検定により検証する必要がある。そこで、上記のスコアについて、サイン検定およびWilcoxonのサインランク検定⁸⁾を使用し、派遣生全体として3ヶ月の留学の前後でPre-TOEFLのスコアに差があるか、つまり3ヶ月留学が派遣生の英語力のうち、どのような能力を向上させるのに効果があったかを統計的に検証した。

4. 3. 結果と考察

表4は、留学前と比較した留学後のスコアの伸び率をパーセントで示したものである。数字にマイナスがついているものは、留学後のスコアが下がったことを示す（派遣生Bの総合および文法についての伸び率は算出していない）。

表4：Pre-TOEFLスコアの伸び率（%）

派遣生	総合スコア	リスニング	文法	リーディング
A	2.4	11.4	-2.4	-2.4
B	—	11.1	—	2.5
C	18.4	25.6	35.1	-5.3
D	11.9	9.5	4.9	24.2
E	-1.1	10.5	-2.7	-10.5
F	17.2	28.9	18.9	2.7
平均	8.2	15.9	9.7	1.3

この結果を見た限りでは、派遣生全体として留学後のPre-TOEFLスコアはやや伸長していると見ることができる。特にリスニングについては約16%の伸びが確認される。これに対し、文法

およびリーディングパートの平均の伸び率は比較的小さく、個人的に見ると留学後のスコアがやや下がっている派遣生も見受けられる。総合点の平均の伸びが比較的小さいのは、上記の2つの要素の伸びが小さかったことが反映されているといえる。

それでは、上記の平均の差について、統計的にはどのような意義があるだろうか。2種類の検定の結果、リスニングについては統計的有意差あるいは有意傾向が見られた（サインランク検定： $p < .05$ 、サイン検定： $p < .1$ ）。一方、総合点、文法およびリーディングについては、両検定とも有意な差は見られなかった。つまり、Pre-TOEFLのスコアを見る限りでは、3ヶ月留学はリスニング能力の伸長には効果があったが、総合運用能力、文法・語法、語彙・リーディング力の伸長には影響しなかったということが判断できる。個々の派遣生の成績を見ると、スコアの下がった者もいれば上がった者もいる。しかし、これらのプラスマイナスは、派遣生の傾向全体を左右するほどのものではなく、リスニングを除き、事前・事後テスト間にスコアの差は見られないと解釈できる。

このように、米国への3ヶ月の語学留学後にリスニングパートで伸長が見られたことにより、英語圏での言語使用が「聞く・話す」の能力の養成に貢献したといえることができる。派遣生は平日、1日あたり4時間の授業の中で、教員の指示や説明を英語で聞き、英語で言語活動を行っていた。同じクラスに日本人がいることがあっても、他国の学生も多く、教室での言語はほとんどが英語であった。カレッジの授業に加えて、家に帰ってもホストファミリーとは英語で会話をし、テレビ番組を観るにしても英語であり、町に出かけても使用する言語は必然的に英語である。彼らが英語に触れなかった時間は非常に少ない。教室で英語しか使用できない状況に加え、寮やアパートなどに滞在するのではなく、一般家庭にホームステイするという状況が、派遣生のリスニングやスピーキングの訓練を自然な形で促したことが、リスニング能力の伸長につながったといえよう。

したがって、特にいわゆる「勉強」という概念でくくられるような活動がなくとも、英語を聞き、話すという活動には無意識に相当な時間が費やされたと推測できる。研究によれば、実生活における言語活動のうち、「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」活動に費やす時間の比率は10:5:3:2だとされている（Rivers, 1981; Weaver, 1972）。人間が情報を伝達しあう手段として、聞いたり話したりするコミュニケーションには読み書きのコミュニケーションの3〜5倍の時間を費やすのである。

留学前後に実施したPre-TOEFLには、英語を話す能力を測るテストは含まれていない。したがって、留学がスピーキング能力の向上にどれだけ貢献したかは、はっきりしたデータがないが、派遣生に対して行った事前・事後指導において彼らの話す英語を聞く限りでは、留学後のほうが格段に流暢に話ができるようになったという印象を受ける。スピーキング能力の測定は比較的困難ではあり、今回の調査ではテストを行って留学前後の差を見てはいないが、今後の調査課題としては興味深い。

リスニングのスコアと比較して、文法や語彙、リーディングに関するスコアに伸びが見られなかったことには、いくつかの理由が考えられる。1つは、GRCCのカリキュラムに基づいた派遣生の英語学習形態が、文法や語法の詳細について問うPre-TOEFLの問題には対応していなかったことであろう。派遣先ではリスニング・スピーキング能力を養成する“Oral”の授業の他に、Grammar、Reading、Writingの3つの読み書き能力を養成する講座も設けられてはいたが、授業はいずれも、細かい語法や文法についての訓練を受けるものというよりは、多くの自然な英語に接し、言語活動を行う中で語法や文法項目を習得していくことや、これまでに学習した内容を復習することを主眼とするものであった。このような“whole-language approach”的な言語

学習の効果が文法や語法の習得に結びつくには、3ヶ月の語学留学は短かかったのかもしれない。では、“Reading”の講座が設けられていたにもかかわらず、Pre-TOEFLのリーディングセクションに伸びが見られなかったのはどういう理由からであろうか。派遣生は日本にいるときよりも数倍の量の英文を授業や宿題で読まされたにもかかわらず、そのような多読練習の効果はTOEFLの結果には反映されていない。そこで、詳細にSection 3の解答状況を見てみると、本調査のテスト受験者6名のうち、留学後のテストでこのセクションに最後まで解答した派遣生は1名のみであった（表4の派遣生D：Section 3の伸び率は約25%）。TOEFLは信頼性を確保するため、かなり多くの問題を課している。加えて、読解能力を測るパートは最後に設定されているため、派遣生はリーディングの問題にほとんど解答していなかった。このように、短期留学が読解力の伸長に寄与しなかったと考えることもできるが、効果測定テストの構成による影響も無視できない。

前述したように、留学効果を測定するテストとして使用したPre-TOEFLには、スピーキング能力やライティング能力を測る項目はない。本調査では、上記のような留学効果を測ろうとするテストの性質によって、正確な能力の伸長が測れない可能性が示唆された。今後はTOEFLのような標準化された客観的な能力を測定できるテストに加え、派遣生の実質的な英語運用能力、特にスピーキングやライティングのようなプロダクション能力を測定するような工夫も必要であろう。

5. おわりに

本稿では、今年度よりスタートした短期語学留学プログラムのうち、3ヶ月プログラムの効果測定を行った。その結果、プログラムが派遣生のリスニング能力の伸長に効果があることがわかった。プログラム開始初年ということで統計処理に使える母集団数も少なく、この結果を即一般論として述べることはできない面はあるが、ある程度の成果を修めたと考えられる。今後は、毎年派遣されるであろう派遣生の効果測定を続けていくのに加えて、6ヶ月プログラムおよび3週間の海外語学研修についてもそれぞれ効果測定を行い、海外経験と英語教育との関係を数量的に考察していくこととする。

注

- 1) 自学自習プログラムSEMの概要については、田村ほか（1998）を参照されたい。
- 2) 「海外語学研修」では1年後期の事前指導を経て1年終了時に実際の研修を行い、2年前期に事後指導を行っている。事後指導では各受講学生が研修内容をホームページとしてまとめ、それをインターネット上で公開している（下記は2000年2月の研修レポートのURL）：
<http://www.n-seiryu.ac.jp/~nonaka/hs00/>
- 3) これまでのところ、海外留学と英語運用能力の伸長について具体的な数値をともなった効果測定を行った研究は、多くはないようである。海外研修を何らかの形で研究対象としたものとしては、Kitao(1993)、竹内(1998)、山根(1985)、Yamane and Hodgins(1987)、Yashima and Viswat(1991)などがあるが、そのうちで英語運用能力に焦点をあてたものは、Kitao(1993)、山根(1985)に限られる。
- 4) ITP=Institutional Testing Program。このテストは、英語を母語としない者の英語運用能力を測ることを目的としたTOEFL(Test of English as a Foreign Language)の問題から編集された、ミニTOEFLともいえる標準化されたテストである。実際のTOEFLとも相関が高い。Pre-TOEFL

はTOEFLから比較的基本的な問題を抜き出して作成されたテストで、一般のTOEFLではその能力がスコアに反映されない、比較的英語力の低い受験者の英語力を測ることができるとされている。

5) GRCCでの2000年秋学期の集中英語課程の出身国別在籍者数は下表のとおり。

表5：集中英語課程の出身国別在籍者数（2000年秋学期）

韓 国	25	中 国	2
日 本	17	パ ナ マ	1
台 湾	16	パ レ ス チ ナ	1
サウジアラビア	3	ク ウ ェ ー ト	1
インドネシア	3	香 港	1
コロンビア	2	チ リ	1

- 6) 最終成績が合格にあたる80点に一部満たない派遣生が1名いるが（派遣生J）、これは件の派遣生が現地で病気となり、2週間にわたって授業に出られなかった影響が大きいと考えられる。
- 7) テストは3つのパートからなり、Section 1はリスニング能力、Section 2は文法構造や語法の能力、Section 3は語彙およびリーディングの能力を測る。総合点は500点を上限とし、それぞれのセクションのスコアは50点を最高点とする。各スコアとも素点ではなく、偏差をもとにした数値。
- 8) Pre-TOEFL受験者が派遣生全体で6名のみで、スコアが正規分布をなしている保証がないなどの制約を考え、これらの検定を使用することにした。

参考文献

- Kitao, S.K. 1993. "Preparation for and results of a short-term overseas study program in the United States." *Bulletin of Institute for Interdisciplinary Studies of Culture, Doshisha Women's College*, 10, pp.107-118.
- Rivers, R.M. 1981. *Teaching Foreign Language Skills*, 2nd. Ed. Chicago: University of Chicago Press.
- 竹内理. 1998. 「海外研修プログラムがStrategy使用に及ぼす影響について：Strategy Trainingの観点から」ことばの科学研究会(編)『ことばの心理と学習—河野守夫教授退職記念論文集』金星堂. pp.327-339.
- 田村恭子、木村哲夫、野中辰也、コーエン・エイドリアン、スワレス・アーモンド. 1998. 「英語自学自習プログラムの開発：Seiryō English Multiathlonの導入」『新潟青陵女子短期大学研究報告』第28号, pp.11-22.
- Weaver, C. 1972. *Human Listening: Processes and Behavior*. New York: Bobbs Merrill.
- 山根繁. 1985. "Studying in Canada: effects on listening comprehension." *Journal of Tezukayama College*, 22, pp.113-124.
- Yamane, S. and Hodgins, B. 1987. "English language learning immersion environment relative to classroom environment." *Journal of Tezukayama College*, 24, pp.87-94.
- Yashima, T. and Viswat, L. 1991. "A study of Japanese high school students' intercultural experience: 'It's not a dream country, but I love America.' Change in image of Americans." *Human Communication Studies*, 19, pp.181-194.

付 記

各執筆者は、主に野中が留学プログラム概要その他を、田中がGRCCでのプログラム内容、隅田がプログラムの効果測定を分担した。